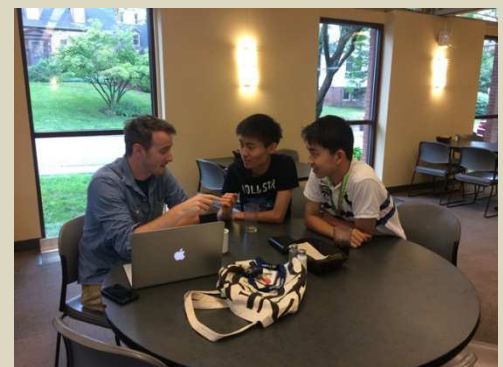


■現地研修 5 日目： 7 月 13 日（木）

研修 5 日目、ボストンでのプログラムも早くも折り返し地点を過ぎました。英語クラスでの他国生との交流、カフェテリアでは大学生や外部の方（時に教授や、研修で来られた日本の省庁職員にもお会いしました）、そして現地の高校生へのアタックなど、ようやく自信がついてきた頃ですが、タフツ大学での研修は残り二日となりました。

英語クラスでは、授業のレベルを上げてほしいと先生に自ら交渉をした生徒、上のクラスに変えてほしいとやはり交渉をし、結果承諾された生徒、いずれも自分たちの力だけで環境を変えました。そういった個々のアクションを引き出すことがこの研修の目的の一つであり、むしろ本質といえるのかもしれません。

また、英語クラスでの意欲的な動きを反映してか、あるいは反対に悔しい思いからか、数人のグループに一人でアタックする生徒の姿も見られました。彼に感想を聞いてみると、「自分と同じ興味（将来像）を持った人で、多くの時間意見交換することができた」、と本当に嬉しそうに話してくれた表情が印象的でした。大小さまざまな成功体験が、カフェテリアのあちこちのテーブルで生まれています。また、ある生徒からは、「もっと早く行けばよかった」、とやはり悔しさ滲ませながらも嬉しそうなコメントもありました。小さなテーブルですが、自分からのアクションで、大きな自信を得、同時に大きな課題を得る生徒も多いことでしょう。



午後は、間違いなく多くの生徒にとってのハイライトの一つ、MIT（マサチューセッツ工科大学）への訪問。ゲストとしてお越しいただいたのは、同大学大学院にて経済学（専門は計量経済学）を研究される梶（かじ）哲也氏。慶応大学から東京大学大学院を卒業、外資系銀行勤務を経て、MITに拠点を移し今年で5年目、将来は大学教授を目指していらっしゃるということです。競歩かと思うくらいに早い梶先生の足取り、自転車レースのような激しい先頭交代を繰り返しながら聞き逃すまいと食らいつく生徒たち（男子に負けず女子も）の姿がありました。梶さんも彼らの熱意にしっかり応えてくれるように、時に足を止め真摯に、丁寧に、専門以外の質問でも分かりやすく答えを返していただきました。

尚、特別に見学経路にある「講義室」を使わせていただき、15分ほどではありましたが質疑と懇談を実施、束の間MIT生の気分も味わうことができました。その後、COOP（いわゆる大学生協）にてしっかりと大学グッズを購入し、最寄駅（Kendall）を後にしました。

夕食後は、二つに分かれてのアクティビティー。一つは、ボストン市街中心部にある「プルデンシャル・センター」（高層ビル）とその周辺エリアを散策。もう一つは、スポーツ・アクティビティー（現地スタッフとともにバスケット）が実施されました。常に、「この研修中にやりたいこと、ボストンでしかできないこと」を投げかけられながら、これらもその一つとしてそれぞれに楽しんでいたようです。

22時半を過ぎようかという頃、生徒たちによるミーティングが実施されました。ボストンでの研修は、いよいよ明日のみ。そして土曜日の班別自主研修を控え、本当にこのままでいいのか、満足できる研修となっているのか、その満足のラインは低くないのか、と先生方からの投げかけに自問自答をしながら、自分自身と向き合いました。30分ほどの時間でしたが、手を挙げ発言した者、そうでない者それぞれに深く考えた時間であったことは間違いありません。やってできなかった悔しさはあっても、やらなかった悔いを持ち帰ることがない研修（タフツ大での）最終日となることを期待し、本日の報告とさせていただきます。

